

## 2019年度蓼科サマーセミナー総括

文責 八木 匡

1. 2019年9月10日、11日、12日と、東急蓼科リゾートにて、文化経済学会<日本>蓼科サマーセミナーが開催され、学会員12名が参加した。懇親会等、アットホームな雰囲気の中で、充実した有意義な議論が行われ、参加者の満足度は大変に高いものとなった。

統計セミナー：八木匡氏により基礎理論を2時間解説した後、ホテル需要個表データを用いた、需要行動の実証的分析を行った。特に、消費者の選好タイプとパーソナリティデータと、選択ホテルタイプとの関連を分析したのち、ホテルのマーケティング戦略の妥当性をデータから検証する議論を行った。

エクスカージョン：土屋正臣氏によってプロデュースされたエクスカージョンでは、縄文文化による街づくりに焦点が当てられた。尖石縄文博物館では、国宝の「縄文の女神」の解説を学芸員からお聞きした。茅野市が、5000年前において、日本において最も人口の多い繁栄した地域（縄文銀座）であったという印象的な話を交えながら、茅野市が縄文文化を用いた地域活性化と街づくりを行っているという説明を受けている。また、茅野市市民会館では、市民が中心となって、行政と協働しながらホールおよび美術館を運営していることの意義と有効性について、辻野隆之館長より説明を受けた。市民にとっての「サードプレイス」としての市民会館の位置づけは、重要なメッセージを含んでいる。

土屋正臣氏による報告：縄文文化を用いた地域活性化と街づくりの可能性について報告があり、縄文文化の価値を明確化する議論を行った。縄文文化に対する画一的イメージの形成、敷衍している誤った知識に基づいた体験学習といった課題が提示されている。そのため、縄文文化に関する科学的な基礎を明確化して、「縄文時代の人々のエモーション」と言ったストーリーを、土器・土偶から語るといった方法により、観光客に対して効果的に訴求できるのではという議論が交わされた。

小泉凡氏による報告：ラフカディオ・ハーンの文化的価値を議論し、地域活性化と街づくりに与える影響について報告があった。「子ども塾ースーパーへるんさん講座」（松江市2004~2016）では、五感を使って町歩きをするといった方法によって、子ども達の五感を育てる試みの説明等、具体的な取り組みを報告された。

五感力、好奇心と想像力、PBE(place based experience)と、怪談の価値との関連について解説があり、どのように観光に結びつけたかについて説明があった。「ミステリー・ゴーストツアー」の特色についての説明において、怪談の文化的価値の明確化を進めることが重要であるとの指摘があり、文学研究を踏まえた作家と事績の社会的活用により、持続可能な

共生社会に寄与できるとの議論があった。

敷田麻美氏による報告：観光を通じて、観光客が主体的に創造的活動を行い、それにより高い満足感と幸福感を達成できるような仕組みを提供することを、クリエイティブ・ツーリズムの核心と捉え、クリエイティブ・ツーリズムの現状と課題について報告があった。パデューカ市のクリエイティブ・ツーリズムの例では、DMO (Destination Marketing Organization)が宿泊税によってARP (Artist Relocation Program : Lower Town)において芸術家の定住を促進するため、市が不動産をアーティストに安く提供)を運営している例が紹介された。質の高い創造性をもたらすために、DMOがシステムティックにアーティストと協働しながら、クリエイティブ・ツーリズムを育成することの重要性が議論された。

米倉卓氏による報告：オリンピックにおける力の構造について報告があり、IOC収入の73%を占める放映権料に過大に依存したオリンピック運営の脆弱性と危険性について問題指摘が行われた。このようなリスクに対して、オリンピックの本来の理念を達成することが、長期的にIOCにとって利益となるという考えを広く浸透させながら、オリンピックに対する世界的レベルでの支持を高めていくことが重要との議論があった。また、オリンピックを通じたナショナリズムの喚起が、オリンピックの本来の理念と整合的であるのかという問題のなされており、現実と理念との乖離が議論された。